



## シモキタの指紋

—下北沢再開発における街のありかたに関する提案—

小倉 大助 (おぐら たいすけ)

日本大学 生産工学部 建築工学科



現在、下北沢には鉄道の地下化に伴い都市道路を整備し街の脆弱な防災機能を高めようとする計画がある。しかし、この計画は街の基本構造を破壊しシモキタのアイデンティティを失わせる。私はあえてこれらの計画を受け入れた上で街の繋ぎ目に移動や歩く行為を豊かにする建築を提案する。計画ではシモキタを一つの大きな家と捉え、豊かなヘヤ（既存街区）を出来るだけ残しつつもそれらを繋ぐ建築を計画した。計画道路によって生じる隔たりを、家を構成するヘヤ以外の要素（街の玄関、本棚、カベ、マド、廊下、収納、キッチン）、で補完し繋ぎ合わせていく。次第に街は輝きを取り戻していく。それらはまるでシモキタの指紋というアイデンティティを取り戻すかのような風景を描く。



**【講評】** この作品は、実際に進行している下北沢地区再開発計画と、昔ながらの界限性に富む「シモキタ」のギャップを埋める試みである。作者は「シモキタ」を一軒の家に喩え、駅前図書館を家の中の本棚に見立てたり、再開発のメガスケールと既存街区のヒューマンスケールを調整する表皮のような建築を家の壁・窓・収納に擬える。更に、計画道路の上にリビングやキッチンに擬えた歩行者用デッキを架け、その形を以前あった建物形状で規定するなど、「街の記憶」をもとにデザインを行っている。「新しいけど懐かしい」シモキタは「まちは記憶の継承である」という作者の考えに裏打ちされている。今後の課題としては、多くの住人の記憶をまちづくりに取り入れるシステムにも挑んでもらいたい。

(審査員：古里 正)